

# 「身体障害者福祉展」における日本点字図書館の 活動実態：「事業報告」調査より

Japan Braille Library's Activities at the "Welfare Exhibition for the Physically Handicapped": An Analysis of Business Reports Survey from 1957-1975

NISHIWAKI Tomoko

西脇智子

日本語コミュニケーション学科准教授

## 抄録：

本稿は日本点字図書館が支援者に送付した『感謝録』の「事業報告」調査研究である。昭和39年の世界盲人福祉会議出席のため渡米した本間一夫はその帰途ヨーロッパを回り欧米の盲人用具150点を収集し、これを機に昭和41年の盲人用具販売に至る。調査の結果、同館が「身体障害者福祉展」に「和製盲人用具」を出展した史実が浮かびあがってきたことは特筆すべきことである。

## Summary：

The subject of this study is the "Appreciation List" sent by the Japan Braille Library to its supporters. HONMA reported on the actual status of activities, noting the "Annual Business Report" with gratitude. In 1964, HONMA visited the U.S. to attend the World Council of Welfare for the Blind and then toured Europe to obtain some 150 items useful for persons with visual impairments. This led to the start of sales of products for persons with visual impairments in 1966.

Of special note is his efforts to promote the research, development, and dissemination of Japanese-made products at the Exhibition for the Welfare of the Physically Handicapped.

キーワード：日本点字図書館、『感謝録』、事業報告、盲人用具、和製、身体障害者福祉展、  
本間一夫

**Keywords** : Japan Braille Library, "Appreciation List", "Annual Business Report", useful for persons with visual impairments, Japanese-made products, Exhibition for the Physically Handicapped, Kazuo HONMA

## はじめに

わが国で初めて障害をもつ国民を対象とした法律が立法されたのは昭和24(1949)年12月3日のことである。第6回臨時国会の最終日、夕刻の参議院本会議において決選投票により可決、成立したのが「身体障害者福祉法」である。12月26日公布、翌昭和25(1950)年4月1日に施行され、わが国法制史上、初めての更生(リハビリテーション)法が誕生した(丸山1998:1)。

社会福祉法人日本点字図書館は、この「身体障害者福祉法」第5条「身体障害者更生援護施設」の一つとして規定された点字図書館と点字出版施設に該当する。同第33条に「点字図書館は無料または低額な料金を盲人の求めに応じて閲覧させる施設とする」、また第34条に「点字出版施設は無料または低額な料金を点字刊行物を出版する施設とする」と規定されている(本間2004:490)<sup>註1</sup>。すなわち、点字図書を集積するとともに自ら製作し、これを郵送貸出して盲人の利用に供する施設が社会福祉法人日本点字図書館である。創設者の本間一夫(1915-2003)は、指と耳で読む読書を具現させるために、点字図書・録音図書の製作貸出活動を事業展開するとともに、第三の事業として用具部をも発足させて盲人福祉に尽力したことは周知のとおりである。

日本点字図書館の第三の事業となる用具部への道を拓いた欧米視察は、同館初代後援会長の式場隆三郎の英断によるものである。昭和39(1964)年の欧米視察の折に持ち帰った盲人用具150点は、翌年、同館ならびに「身体障害者福祉展」において展示された(西脇2023:75)。筆者は、この「身体障害者福祉展」に注目して調査を継続するため、同館の『感謝録』を顧みた。

『感謝録』とは、社会福祉法人日本点字図書館が支援者に対して送付しているもので、①「本館を支えて下さった方々の芳名」を明記するとともに、②本間一夫による「感謝の言葉」を述べ伝える使命を担っており、さらに③「事業報告」と題して諸活動の成果を各部門別に略述した記事を掲載している。本間一夫と日本点字図書館の活動の史実を把握する上で有用な原本となっている。

そこで、本稿では、この『感謝録』の「事業報告」に着目し、①日本点字図書館初代後援会長が率いた「渡米支援後援会」が発足した昭和39(1964)年を中心に置いて、②昭和39年度以前、③その後10年度、すなわち昭和49年度までの実態把握を試みた。

本研究の目的は「身体障害者福祉展」における日本点字図書館の活動を明らかにすることである。

## 1. 「事業報告」調査の結果と考察

本研究の研究対象は、社会福祉法人日本点字図書館が支援者に送付している『感謝録』である。この『感謝録』の「事業報告」に着目すると、「各種集会」に関する報告事項に「福祉展其他出陳」と題して、「身体障害者福祉展」等への出陳に関する記事が掲載されていることが判明した。

本調査で収集した記事は、『感謝録』の「各年度事業報告」の大見出し「事業一般」に次いで、中見出しの「各種集会」の報告事項の中に「福祉展其他出陳」および「資料出陳」と題する小見出しに記載されていたものである。収集した記事を時系列に整理すると「身体障害者福祉展」における日本点字図書館の活動実態が浮かび上がってきた。

#### 1-1. 「身体障害者福祉展」における日本点字図書館の初出展の時期について

本間一夫が「身体障害者福祉展」における日本点字図書館の活動を始動したのはいつからであろうか。

『感謝録』の「事業報告」調査の結果、昭和32（1957）年発行の『昭和31年度 感謝録：本館を支えて下さった方々の芳名』に、「身体障害者福祉展」に関する初掲載が確認された。この『感謝録』の表紙には、「身体障害者福祉展に出陳（西武デパート・957・5）<sup>註2</sup>」と題する写真が掲載されている（図1）。この写真の内容は、次年度発行の『昭和32年度 感謝録：本館を支えて下さった方々の芳名』の掲載記事と読み合わせることによって、「できごと」を把握することが可能となった。

図1 昭和32年「身体障害者福祉展」出陳



出典：日本点字図書館所蔵

また、『日本点字図書館五十年史』の昭和31（1956）年の「できごと」を照合すると、「5月21日-27日 上野松坂屋で開かれた身体障害者製作品展示会<sup>註3</sup>に参加、点字書、点字器、点字タイプライター、その他出品」<sup>註4</sup>と明記されていたことが判明した（日本点字図書館50年史編集委員会編1994：191）。この「できごと」は、後述する朝日新聞の掲載記事の会場と一致した。したがって、日本点字図書館が「身体障害者福祉展」における活動を始動したのは、昭和31年開催の「第5回身体障害者福祉展」と判断することが妥当であろう。

なお、本間一夫が『忘れ残りの通信集』の昭和31年5月11日付「第29信」に盲人用具（時計、杖、算盤、タイプライター）を紹介しているのは奇遇なことである（本間1999：70-72）。

## 1-2. 昭和39年の海外視察以前の活動について

昭和33(1958)年～昭和39(1964)年に発行された『感謝録』には、昭和32年度～昭和38年度の「事業報告」が掲載されている。「福祉展其他出陳」には、昭和39年の海外視察以前から、「身体障害者福祉展」に出展していたことを示す記事が掲載されており、昭和32年の開催時から7回連続して出展していたことが判明した(表1)。

昭和39年の海外視察以前の日本点字図書館は、「指先で読む点字書と耳で聞く録音テープの製作と無料貸出」を目的とする活動を具現していた時期である。すなわち、「身体障害者福祉法」第5条「身体障害者更生援護施設」の一つとして規定された点字図書館と点字出版施設に該当する。同法が規定する活動に照らして「身体障害者福祉展」に出展していたことが推察された。

なお、筆者は表1から表4の作表にあたり、「身体障害者福祉展」への出展に関する記載箇所に黄色のマーカーを引いて年度別に記した。

表1 昭和32年度～昭和38年度「事業報告」より

「事業報告」の年度別	掲載記事「福祉展其他出陳」の記述内容について
昭和32(1957)年度 事業報告	5月下旬に一週間、厚生省主催「身体障害者福祉展」が西武百貨店において開催され、本館より資料出陳の他点字製版の実演に出張し一般の好評を博した(本文のまま)。この他、理科大学、教育大学、静岡女子高校等にも同様出陳した。 (出典：昭和33年9月発行『感謝録』3ページ)
昭和33(1958)年度 事業報告	7月8日から一週間、厚生省主催「身体障害者福祉展」が西武百貨店において開催され、本館より資料出陳の他点字製版の実演に出張し一般の好評を博した(本文のまま)。この他、理科大学、調布学園、等8校にも同様出陳した。 (出典：昭和34年6月発行『感謝録』3ページ)
昭和34(1959)年度 事業報告	5月25日から一週間、厚生省主催「身体障害者福祉展」が池袋三越百貨店において開催され、本館より資料出陳の他実演に出張し一般の好評を博した。この他、各大学、各高校の文化祭等にも同様出陳した。 (出典：昭和35年6月発行『感謝録』3ページ)
昭和35(1960)年度 事業報告	4月26日から5月1日まで、厚生省主催「身体障害者福祉展」が日本橋三越本店において開催され、本館より資料出陳の他実演に出張し、天皇皇后両陛下の御来覧もあり一般の好評を博した(本文のまま)。この他、各大学、各高校の文化祭等にも同様出陳した。 (出典：昭和36年7月発行『感謝録』3ページ)
昭和36(1961)年度 事業報告	4月13日から一週間、厚生省主催「身体障害者福祉展」が池袋三越支店において開催され、本館より資料出陳一般の好評を博した。この他各大学、各高校の文化祭等にも同様出陳した。 (出典：昭和37年9月発行『感謝録』3ページ)

昭和 37 (1962) 年度 事業報告	5月15日から一週間厚生省主催「身体障害者福祉展」が三越池袋支店において開催され、本館より資料出陳一般の好評を博した(本文のまま)。この他各大学、各高校の文化祭等にも同様出陳した。 (出典：昭和 38 年 8 月発行『感謝録』3 ページ)
昭和 38 (1963) 年度 事業報告	5月の厚生省主催「身体障害者福祉展」及び各大学・高校の文化祭に資料を出陳、観覧者の講評を博した。 (出典：昭和 39 年 7 月発行『感謝録』3 ページ)

### 1-3. 昭和 39 年度～昭和 41 年度「事業報告」より

昭和 40 (1965) 年～昭和 42 (1967) 年に発行された『感謝録』には、昭和 39 年度～昭和 41 年度の「事業報告」が掲載されている。

昭和 39 年度と昭和 40 年度には「欧米盲人用具展示会」と題する新たな見出しが加わった。また、昭和 40 年度には、さらに「盲具研究会」の報告も掲載された。昭和 40 年度以降、「福祉展 其他出陳」は「資料出陳」という見出しとなり、昭和 41 年度には、「資料出陳」「欧米盲人用具展示会」の両方の見出しから「身体障害者福祉展」への参加実態を読み取ることができる。昭和 39 年の開催時から 3 回連続して出展していたことが判明した(表 2)。

昭和 41 年度の「事業報告」には、社会福祉法人日本点字図書館の第三の事業となる「用具部の新活動」に関する記事が初めて掲載されたことは特筆すべき事である。

なお、『感謝録』には欧米視察に関する記事も掲載された。昭和 40 年に発行された『感謝録』の冒頭ページの「感謝の言葉」には、本間一夫による欧米視察への謝意が明記された。以下に引用する。

(前略) 今ひとつ感謝すべき事は、昨年夏、50 日にわたって加藤理事と共に、式場博士を会長とする後援会のお力により、欧米 9 カ国を視察できたことであります。先進諸国の進んだ盲人読書の現状を学び、その中にこの事業に漸次とりいれられるいくつかの事を発見できました。また持ちかえった 150 点の盲人のため工夫された生活用具は、これまで全く未開拓だったわが国のこの分野に、大きなセンセーションをまきおこすこととなりました。(後略)

(出典：昭和 40 年 7 月発行『感謝録』1 ページ)

表 2 昭和 39 年度～昭和 41 年度「事業報告」より

「事業報告」の年度別	掲載記事の記述内容について
昭和 39 (1964) 年度 事業報告	「福祉展 其他出陳」 4月の厚生省主催「身体障害者福祉展」及び各大学・高校の文化祭に資料を出陳、観覧者の講評を博した。 (出典：昭和 40 年 7 月発行『感謝録』3 ページ)

	<p>「欧米盲人用具展示会」 40年2月20日、21日の両日本館二階集会室において、一般展示会を開いた。北は東北、南は九州まで、420名の参加者があり盛会であった。 (出典：昭和40年7月発行『感謝録』3ページ)</p>
<p>昭和40(1965)年度 事業報告</p>	<p>「資料出陳」 4月の厚生省主催「身体障害者福祉展」及び各大学・高校の文化祭に資料を出陳、観覧者の講評を博した。 (出典：昭和41年発行『感謝録』3ページ)</p> <p>「欧米盲人用具展示会」 (昭和)40年5月18・19両日、本館二階集会室において第2回一般展示会を開いた。北は東北、南は九州まで158名の参観者があり、盛会であった。7月23日第3回展示会を全日本盲教育研究会出席の教育者のため開催、出席参観者68名。 (出典：昭和41年発行『感謝録』3ページ)</p> <p>「盲具研究会」 盲人計量器協会と共催で盲人用具の研究会を5回開き、各種計量器の開発に協力した。 (出典：昭和41年発行『感謝録』3ページ9)</p>
<p>昭和41(1966)年度 事業報告</p>	<p>「資料出陳」 4月の厚生省主催「身体障害者福祉展」及び各大学・高校の文化祭に資料を出陳、観覧者の講評を博した。 (出典：昭和42年発行『感謝録』3ページ)</p> <p>「欧米盲人用具展示」 新宿小田急百貨店に開かれた「身障福祉展」(本文のまま)に150点の欧米盲人用具を展示したが、初日に皇太子殿下ご夫妻が来臨、本間、加藤両理事がご説明申上げた。妃殿下から盲婦人用に考案された各種台所用品について種々暖かいご下問があった。(本文のまま) (出典：昭和42年発行『感謝録』3ページ)</p> <p>「用具部の新活動」 盲人のための生活用具の開発普及をはかる目的で誕生した用具部は、「松下電気録音事業部」や「盲人用計量器協会」と密接な連絡をとり、左記の用具を提供、盲人福祉の拡大に資した。(本文のまま) 盲人用リーディングマシン(4トラック、テープレコーダ)442台、家庭用上皿秤、寒暖計、タイマー、ノギス、ポット、メジャー、身長計、体重計、トランプカード、カナモジタイプ等合計962点取扱。 (出典：昭和42年発行『感謝録』3ページ)</p>

## 1-4. 昭和 42 年度～昭和 45 年度「事業報告」より

昭和 43 (1968) 年～昭和 45 (1970) 年に発行された『感謝録』には、昭和 42 年度～昭和 45 年度の「事業報告」が掲載されている。記事「福祉展其他出陳」(昭和 40 年度からは「資料出陳」)には、「身体障害者福祉展」への参加実態を読み取ることができる。昭和 42 年の開催時から 4 回連続して出展していたことが判明した(表 3)。

昭和 42 年度事業報告からは、前年度までの「欧米用具展示」の項目はなくなり、「国産盲人用具展示」という新たな項目が明示されるようになる。とくに、昭和 42 年から 3 回連続の出展にあたっては、「身体障害者福祉展」に和製盲人用具を展示したことが明記された。この項目は『感謝録』にのみ記されている貴重な情報であることが判明した。また、「昭和 44 年度事業報告」の「厚生省委託事業実施状況」には、初めて「盲人用具の販売斡旋」の項目が明示され、事業報告が記されるようになった。これらは特筆すべきできごとである。

表 3 昭和 42 年度～昭和 45 年度「事業報告」より

「事業報告」の年度別	掲載記事の記述内容について
昭和 42 (1967) 年度 事業報告	<p>「資料出陳」 4 月の厚生省主催「身体障害者福祉展」及び各大学・高校の文化祭に資料を出陳、観覧者の講評を博した。 (出典：昭和 43 年発行『感謝録』3 ページ)</p>
	<p>「国産盲人用具展示」 新宿小田急百貨店に開かれた「身障福祉展」に和製盲人用具を展示したが、初日に常陸宮両殿下が来臨、本間、加藤両理事がご説明申上げた。(本文のまま) (出典：昭和 43 年発行『感謝録』3 ページ)</p>
	<p>「用具部の活動」 盲人生活用具の開発普及を目的に昨年度新発足した用具部は、「松下電気録音事業部」その他と密接な連絡をとり、下記の用具を提供、盲人福祉の拡大に資した。  盲人用リーディングマシン (4トラック、テープレコーダ) 463 台、プラスチック懐中器、家庭用上皿秤、寒暖計、タイマー、ノギス、ポット、メジャー、身長計、体重計、トランプカード、カナモジタイプ、表面作図器、ゲーム各種等、合計 31,283 点取扱。 (出典：昭和 43 年発行『感謝録』3 ページ)</p>

<p>昭和 43 (1968) 年度 事業報告</p>	<p>「資料出陳」 4月の厚生省主催「身体障害者福祉展」及び各大学・高校の文化祭に資料を出陳、観覧者の講評を博した。 (出典：昭和 44 年発行『感謝録』3 ページ)</p>
	<p>「国産盲人用具展示」 新宿京王百貨店に開かれた「身障福祉展」に和製盲人用具を展示したが、初日に皇太子両殿下がご来臨、本間、加藤両理事がご説明申し上げた。 (出典：昭和 44 年発行『感謝録』3 ページ)</p>
	<p>「用具部の活動」 盲人生活用具の開発普及を目的に一昨年度新発足した用具部は、あらたに厚生省委託事業も加わり、下記の用具を提供、盲人福祉の拡大に資した。  盲人用リーディングマシン (4トラック、テープレコーダ) 649 台、プラスチック懐中器、家庭用上皿秤、寒暖計、タイマー、ノギス、ポット、メジャー、身長計、体重計、トランプカード、カナモジタイプ、表面作図器、ゲーム各種等、合計 52,141 点取扱。 (出典：昭和 44 年発行『感謝録』3 ページ)</p>
<p>昭和 44 (1969) 年度 事業報告</p>	<p>「資料出陳」 4月の厚生省主催「身体障害者福祉展」及び各大学・高校の文化祭に資料を出陳、観覧者の講評を博した。 (出典：昭和 45 年発行『感謝録』3 ページ)</p>
	<p>「国産盲人用具展示」 新宿京王百貨店に開かれた「身障福祉展」に盲人用具を展示して、一般社会人の啓蒙に資した。(原文のまま) 出典：昭和 45 年発行『感謝録』3 ページ</p>
	<p>「用具部の活動」 盲人生活用具の開発普及は、厚生省委託事業を加え、盲人福祉の拡大に資した。盲人用リーディングマシン (4トラック) 801 台を始め、点字器類、計量器類、歩行器具類、計算用具類、時計類、家庭用品類、タイプライター類、ゲーム類、地図類、外国製盲人用具、盲人福祉に関する書籍など合計 72,990 点を取扱った。これらの中には盲人用計量器協会の富沢永喜氏によって考案された方位磁石、電話ダイヤルスポット、後藤良一氏によって作られた全国立体地図、月ロケット図などが含まれている。 (出典：昭和 45 年発行『感謝録』3 ページ)</p>



	<p>※この「昭和44年度事業報告」の「厚生省委託事業実施状況」には、初めて「盲人用具の販売斡旋」の項目が明示され、次の状況報告が記された。51種32,248点を取扱った。 (出典：昭和45年発行『感謝録』3ページ)</p>
<p>昭和45(1970)年度 事業報告</p>	<p>「資料出陳」 4月新宿京王百貨店で開かれた厚生省主催「身体障害者福祉展」及び各大学・高校の文化祭に資料を出陳、観覧者の好評を博した。 (出典：昭和46年発行『感謝録』3ページ)</p>
	<p>「用具部の活動」 盲人生活用具の開発普及は、厚生省委託事業を加え、盲人福祉の拡大に資した。30周年記念に開発した盲人用テレビの383台をはじめ、盲人用テープレコーダー(4トラック)、点字器類、計量器類、歩行器類、計算用具類、時計類、家庭用品類、タイプライター類、ゲーム類、地図類、外国製盲人用具、盲人福祉に関する書籍など合計87,178点を取扱った。これらの中には海外への輸出も若干含まれている。 (本文のまま) (出典：昭和46年発行『感謝録』3ページ)</p>
	<p>「厚生省委託事業実施状況」の「盲人用具の販売斡旋」 50種42,599点を取扱った。 (出典：昭和46年発行『感謝録』3ページ)</p>

昭和43年発行の『感謝録』の冒頭1ページに掲載した本間一夫による「感謝の言葉」には、次の文章が記された。

(前略) 昨年度は1日平均800冊以上の点字やテープの図書を、全国の盲人に郵送貸出することができました。図書の借出や(本文のまま)、点字教室や、生活用具の入手に来館する盲人は、都内から、地方から、毎日30名は下りません。(後略)

(出典：昭和43年発行『感謝録』1ページ)

また、「昭和42年度事業報告」の冒頭には、下記の文章が掲載された。

(前略) 発足2年目の用具部は、予想以上の発展をし、厚生省は委託事業中に、盲人用具斡旋費を新規計上するに至った。これに伴い本館定款の目的に、「盲人生活用具の開発と普及事業の経営」を加えることとし、東京都を通じ厚生省に、定款変更を申請中である。(後略)

(出典：昭和43年発行『感謝録』2ページ)

定款変更を申請中の昭和43年発行の『感謝録』からは、最終ページの「日本点字図書館案内」の「目的」に、「指先で読む点字書と耳で聞く録音テープの製作と無料貸出」とともに「盲人生活用具の研究開発と普及」の一文が明示されるようになった。

昭和45年発行の『感謝録』の冒頭1ページに掲載した本間一夫による「感謝の言葉」には、当時の概況が支援者に報告された。以下に引用する。

(前略) この事業は昭和15年11月10日に誕生致しました。従って今年(昭和)45年度は創立満30周年にあたり感慨ひとしお深いものがございます。(中略) この間盲人の読書事業は文字通り一変し、指先による点字から耳で聴くテープへと大きく拡大されたばかりか、様々の便利な生活用具を本館から全国の盲人の家庭に送り届けられるまでになりました。  
(後略)

(出典：昭和45年発行『感謝録』1ページ)

#### 1-5. 昭和46年度～昭和49年度「事業報告」より

昭和47(1972)年～昭和50(1975)年に発行された『感謝録』には、昭和46年度～昭和49年度の「事業報告」が掲載されている。記事「福祉展其他出陳」(昭和40年度からは「資料出陳」)には、「身体障害者福祉展」への参加実態を読み取ることができる。昭和46年の開催時から4回連続して出展していたことが判明した(表4)。

表4 昭和46度～昭和49度「事業報告」より

「事業報告」の年度別	掲載記事の記述内容について
昭和46(1971)年度 事業報告	「資料出陳」 4月新宿京王百貨店で開かれた厚生省主催「身体障害者福祉展」及び各大学・高校の文化祭に資料を出陳、観覧者の好評を博した。 (出典：昭和47年発行『感謝録』3ページ)
	「用具部の活動」 盲人生活用具の開発普及は、厚生省委託事業を加え、盲人福祉の拡大に資した。30周年記念に開発した盲人用テレビの566台をはじめ、盲人用テープレコーダー(4トラック)、点字器類、計量器類、歩行器類、計算用具類、時計類、家庭用品類、タイプライター類、ゲーム類、地図類、外国製盲人用具、盲人福祉に関する書籍など合計97,152点を取扱った。これらの中には海外への輸出も若干含まれている。 (本文のまま) (出典：昭和47年発行『感謝録』3ページ)
	「厚生省委託事業実施状況」の「盲人用具の販売斡旋」 47種44,455点を取扱った。 (出典：昭和47年発行『感謝録』3ページ)

<p>昭和 47 (1972) 年度 事業報告</p>	<p>「資料出陳」 4月新宿京王百貨店で開かれた厚生省主催「身体障害者福祉展」及び各大学・高校の文化祭に資料を出陳、観覧者の好評を博した。 (出典：昭和 48 年発行『感謝録』2 ページ)</p> <p>「用具部の活動」 盲人生活用具の開発普及は、厚生省委託事業を加え、盲人福祉の拡大に資した。本館で開発した声の図書専用機盲人用テープレコーダーの 824 台をはじめ、盲人テレビ、点字器類、計量器類、歩行器類、計算用具類、時計類、家庭用品類、タイプライター類、ゲーム類、地図類、外国製盲人用具、盲人福祉に関する書籍など 105,262 点を取扱った。これらの中には海外への輸出も若干含まれている。(本文のまま) (出典：昭和 48 年発行『感謝録』2 ページ)</p> <p>「厚生省委託事業実施状況」の「盲人用具の販売斡旋」 46 種 53,952 点を取扱った。 (出典：昭和 48 年発行『感謝録』2 ページ)</p>
<p>昭和 48 (1974) 年度 事業報告</p>	<p>「資料出陳」 4月新宿京王百貨店で開かれた厚生省主催「身体障害者福祉展」及び各大学・高校の文化祭に資料を出陳、観覧者の好評を博した。 (出典：昭和 49 年発行『感謝録』4 ページ)</p> <p>「用具部の活動」 盲人生活用具の開発普及は、欧米からの輸入品を加え、盲人福祉の拡大に資した。本館で開発した声の図書専用機盲人用テープレコーダー 852 台をはじめ、盲人用テレビ、点字器類、計量器類、計算用具類、時計類、家庭用品類、タイプライター類、ゲーム類、地図類、外国製盲人用具、盲人福祉に関する書籍など、合計 116,461 点を取扱った。これらの中には海外への輸出も若干含まれている。(本文のまま) (出典：昭和 49 年発行『感謝録』4 ページ)</p> <p>「厚生省委託事業実施状況」の「盲人用具の販売斡旋」 44 種 62,996 点を取扱った。 (出典：昭和 49 年発行『感謝録』4 ページ)</p>
<p>昭和 49 (1975) 年度 事業報告</p>	<p>「資料の出陳」 4月、京王百貨店で開かれた厚生省主催の「身体障害者福祉展」をはじめ、各学校の文化祭などに本館から資料を出陳し、盲人福祉の実情をひろめました。 (出典：昭和 50 年発行『感謝録』4 ページ)</p> <p>「生活用具の開発・普及」 本年度は、本館で開発した録音図書専用の盲人用テープレコーダー 949 台、点字や図形などの便利な複写機であるサーモフォーム 11 台をはじめ、盲人用音声テレビ、点字器、計量器、歩行器、計算用具、</p>

	<p>時計、家庭用品、タイプライター、各種ゲーム用品、地図等々、それに盲人社に関する書籍類までを含めて、ほぼ前年度と同数の113,878点を取扱いました。</p> <p>はげしい物価上昇の中にあつて福祉用具の普及はきわめて苦しい環境におかれたわけですが、コストアップを抑え、かつ本館他事業を圧迫せぬようにするため、心ならずも新製品の開発は抑えぎみにいたしました。でもその間にあつてプラスチック製12行点字器を発売にこぎつけましたことは、利用者からの好評も得て関係者としては大きな慰めでした。</p> <p>このほか、若干ながら海外への輸出もございました。 (出典：昭和50年発行『感謝録』3ページ)</p>
	<p>「事業報告」の「厚生省委託事業」 今年度は41種、53,583点を取扱いました。 (出典：昭和50年発行『感謝録』5ページ)</p>

## 2. 「身体障害者福祉展」とはなにか

本来であれば、社会福祉法人日本点字図書館が出展した「身体障害者福祉展」の所在について、本稿の冒頭において解説すべきところであるが、「身体障害者福祉展」に関する文献調査は難渋し、十分な情報を得ることはできていない。

肝心の第1回目の開催に関しては、内閣府のホームページに掲載されている『平成29年版障害者白書』の参考資料「障害者施策の主な歩み」<sup>註5</sup>により、貴重な情報を得ることができた。しかし、それは、昭和26(1951)年のできごととして、「4月 第1回身体障害者福祉展開催(日本橋白木屋百貨店)」の記載にとどまっております、開催に至る経緯等に関する諸情報については、今後の研究を待たなければならない<sup>註6</sup>。

そこで、本稿では、補足的な調査として朝日新聞の記事調査を試み、国立国会図書館に於いて実施した。補足調査の結果、「身体障害者福祉展」に関する記事を把握することができた。この「身体障害者福祉展」は、「朝日新聞厚生文化事業団」が後援をしていたことが影響しているのか、朝日新聞は「社告」をもって、事前に同展の開催を報じており興味深い。

「身体障害者福祉展」の初回開催の情報は得られなかったものの、第2回目開催以降の期日及び会場、主催者、共催者、展示内容の別に情報を収集することができた(表5)。朝日新聞に掲載された「身体障害者福祉展」に関する掲載記事18件について以下に報告する。

なお、「社告」と重複する内容については記事から省略し、筆者が抜粋して作表した。

表5 朝日新聞が報じた「身体障害者福祉展」

## 1. 昭和28(1953)年6月6日(土)5面「社告」

この「社告」のタイトルは、「身体障害者福祉展」である。

昭和29(1954)年の開催が「第3回」と明記されていることから、前年開催は第2回に該当するものと推察した。この「社告」は、第2回目の開催にあたり一報されたものと読み取った。

期日及び会場	6月9日から14日まで／東京渋谷 東横百貨店7階
内容	補装具と参考品の展示／製作品の展示と即売／更生援護の資料の展示／職業訓練実施室の設置／臨時更生相談所の併設。
主催	厚生省、日本赤十字社、鉄道弘済会、友愛十字会
後援	労働省、東京都、朝日新聞厚生文化事業団

## 2. 昭和28(1953)年6月9日(火)夕刊3面

第2回「身体障害者福祉展」初日に三笠宮殿下が来場されたことを報じる記事が同日夕刊に掲載された。記事のタイトルは「「身体障害者福祉展へ：三笠宮さまも見学」である。

記事の内容は、以下のとおりである。

身体の不自由な人たちを立ち上がらせるための全国身体障害者福祉展が開催／義足、義手、義眼や電気補聴器、車イスなど。参考品270余点陳列／足や手に故障のある人たちが作った衣料、家具、雑貨品の展示即売／※写真掲載「三笠宮さま、山県厚相らが見学」と記す。

## 3. 昭和29(1954)年6月7日(月)7面「社告」

この「社告」のタイトルは、「第3回身体障害者福祉展」である。第3回目開催にあたり「社告」をもって一報された。

期日及び会場	6月8日から13日まで／東京渋谷 東横百貨店7階
主な内容	補装具と参考品／製作品即売／更生援護資料／障害児童画／更生相談所の開設。
主催	厚生省、日本赤十字社、鉄道弘済会、友愛十字会
後援	労働省、東京都、朝日新聞厚生文化事業団

## 4. 昭和29(1954)年6月9日(水)東京版8面

第3回「身体障害者福祉展」初日に三笠宮殿下が来場されたことを報じる記事が翌日の朝刊に掲載された。記事のタイトルは「三笠宮様もご覧：身体障害者福祉展」である。

記事の内容は、以下のとおりである。

展示即売される繊維品、竹細工、家具などいずれも市価の三割から五割安とあって、人気を呼んでいる／午前11時過ぎ三笠宮様が草場厚相の案内で、製作品売り場をご覧になった。

5. 昭和30 (1955) 年6月5日 (日) 夕刊3面「社告」

この「社告」のタイトルは「身体障害者福祉展」である。リードにく身体障害者に対する世の理解を深めるため、第4回「身体障害者福祉展」を次のように催します。>という一文が添えられ、第4回目開催にあたり「社告」をもって一報された。

第4回「身体障害者福祉展」より、「東京都」は共催者から主催者側に転じている。

会期及び会場	6月7日から12日まで／渋谷 東横新館4階サロン
主な内容	最新型各種補装具及び同米、独特別出品／全国各地の身体障害者補導施設その他で製作した衣料、雑貨、家具など一万点の即売（実費販売）／身体障害者の更生相談。
主催	厚生省、東京都、日本赤十字社、鉄道弘済会、友愛十字会
後援	労働省、朝日新聞厚生文化事業団

6. 昭和31 (1956) 年5月21日 (月) 夕刊3面「社告」

この「社告」のタイトルは「身体障害者福祉展」である。社告にはく身体障害者に対する世の理解を深めるため、第5回「身体障害者福祉展」を次のように催します。>という一文が添えられ、第5回目開催にあたり一報された。

※日本点字図書館が「身体障害者福祉展」に出展したのは、この第5回目開催からである。

会期及び会場	5月22日から27日まで／上野 松坂屋
主な内容	最新型各種補装具の展示／障害者更生援護に関する各種資料の展示／全国各地の身体障害者補導施設その他で製作した衣料、雑貨、家具など一万点の展示および即売（実費）／身体障害者の更生相談／障害者の竹細工と信楽焼の実技公開
主催	厚生省、東京都、日本赤十字社、鉄道弘済会、友愛十字会
後援	労働省、朝日新聞厚生文化事業団

7. 昭和31 (1956) 年5月22日 (火) 夕刊3面

第5回「身体障害者福祉展」初日に三笠宮殿下が来場されたことを報じる記事が当日夕刊に掲載された。記事のタイトルは「身体障害者の福祉展」である。

記事の内容は、以下のとおりである。

<p>全国の身体障害者が作りあげた衣服、雑貨、家具など一万点が陳列され、実費で即売もするのでなかなかの人気／三笠宮さまも午前11時ごろ来場され、場内で実演されている国立光明寮の盲目の婦人たちのあざやかな生花の手つきや、信楽焼に感心されていた／※写真掲載「盲人の生花をご覧になる三笠宮」と記す。</p>
--

8. 昭和32 (1957) 年5月19日 (日) 11面「社告」

この「社告」のタイトルは「身体障害者福祉展」である。社告にはく身体障害者に対する世の理解を深めるため第6回「身体障害者福祉展」を次のように催します。>という一文が添えら

れ、第6回目開催にあたり「社告」をもって一報された。

※日本点字図書館は、2回目の「身体障害者福祉展」への出展になる。

会期及び会場	5月24日から29日まで／池袋 西武百貨店
主な内容	最新型各種補装具の展示／障害者更生援護に関する各種資料の展示／全国各地の身体障害者補導施設その他で製作した衣料、雑貨、家具など一万点の展示および即売（実費）／身体障害者の更生相談／障害者のクツシタ編みと信楽焼の実技公開。
主催	厚生省、東京都、日本赤十字社、鉄道弘済会、友愛十字会
後援	労働省、朝日新聞厚生文化事業団

#### 9. 昭和33（1958）年7月7日（月）東京版10面「社告」

この「社告」のタイトルは「第7回身体障害者福祉展」である。社告にはく身体障害者に対する世の理解を深めるため、次のように催します。>という一文が添えられ、第7回目開催にあたり「社告」をもって一報された。

※日本点字図書館は、3回目の「身体障害者福祉展」への出展になる。

会期及び会場	7月8日から13日まで／池袋 三越
主な内容	最新型各種補装具の展示／障害者更生、援護に関する各種資料／全国各地の身体障害者補導施設その他で製作した衣料、雑貨、家具など一万点の展示と実費即売／身体障害者の更生相談／余興として屋上で「盲導犬」による失明者の誘導実演や、国鉄、巨人両野球団選手、映画俳優、レコード歌手ら奉仕のサイン会を期間中行う。
主催	厚生省、東京都、日本赤十字社、鉄道弘済会、友愛十字会
後援	労働省、朝日新聞厚生文化事業団

#### 10. 昭和34（1959）年5月25日（月）8面「社告」

この「社告」のタイトルは「身体障害者福祉展」である。社告にはく身体障害者に対する世の理解と協力を得るため次のような催しを行います。>という一文が添えられ、「社告」をもって一報された。

※日本点字図書館は、4回目の「身体障害者福祉展」への出展になる。

会期及び会場	5月26日から31日まで／池袋 三越
主な内容	障害者の更生援護に関する各種資料の展示／全国各地の身体障害者補導施設その他で製作した衣料、雑貨、家具など一万点の展示と実費即売／最新補装具／点字器具の展示／障害者の更生相談／身障者の竹細工、時計修理、くつした編、印鑑、信楽焼などの実技公開／余興として会場で期間中、巨人、国鉄野球選手、相撲、映画スター、芸能人らのサイン・サービスもあります。
主催	厚生省、東京都、日本赤十字社、鉄道弘済会、友愛十字会
後援	労働省、朝日新聞厚生文化事業団

11. 昭和34(1959)年5月26日(火)東京版12面

「身体障害者福祉展」開催を報じる記事が当日朝刊に掲載された。記事のタイトルは「身体障害者の福祉展」である。

記事の内容は、以下のとおりである。

厚生省、都、日赤、鉄道弘済会、友愛十字会共催の「身体障害者福祉展」が26日から31日まで池袋の三越で開かれる。／身体障害者製作品の展示、即売、更生相談室の設置、竹細工、時計、信楽焼の実技公開などがある。

12. 昭和35(1960)年4月24日(日)東京版12面「社告」

この「社告」のタイトルは「身体障害者福祉展」である。社告にはく身体障害者に対する世の理解を深めるため、身体障害者福祉法施行十周年記念「身体障害者福祉展」を次のよう催します。>という一文が添えられ、「社告」をもって一報された。

※日本点字図書館は、5回目の「身体障害者福祉展」への出展になる。

会期及び会場	4月26日から5月1日まで／日本橋三越本店(7階催し場)
主な内容	①身体障害者の更生援護に関する資料の展示(写真、ポスターなど)／②各種補装具の展示／③全国各地の補導所、授産場その他で障害者がつくった各種衣料、雑貨、竹細工、革製品など数千点の展示、即売／④点字図書および点字器具の展示／⑤身障者の「竹細工」「木彫り」「信楽焼」の実技公開／⑥身障者の更生相談。
主催	厚生省、東京都、日本赤十字社、鉄道弘済会、友愛十字会
後援	労働省、朝日新聞厚生文化事業団

13. 昭和35(1960)年4月26日(火)夕刊5面

「身体障害者福祉展」開催を報じる記事が当日夕刊に掲載された。記事のタイトルは「両陛下・「身体障害者福祉展」へ」である。

記事の内容は、以下のとおりである。

身体障害者福祉法施行十周年を記念して、26日から東京・日本橋の三越本店で開かれた「身体障害者福祉展」に天皇、皇后両陛下がおいでになった／この展示会は、身体障害者の福祉行政についての資料と全国の職業補導所や授産所にいるからだの不自由な人たちが作った手芸品、美術品など五千点が出品されている／この日両陛下は午前9時50分から約1時間にわたって熱心にごらんになった／図表やグラフに示された身体障害者施設の発展ぶりにうなずきながら「施設がふえるのはけっこうだが、内容の充実も大事だね」と感想をもらされていた。

昭和35年の「身体障害者福祉展」は、身体障害者福祉法施行十周年を記念して開催されたものである。宮内庁が著作権者である『昭和天皇実録 第十三』の4月26日には、侍従日誌より「身体障害者福祉展」への行幸に関する詳細な記録が明記されている(宮内庁2017:51)。



## 14. 昭和 36 (1961) 年 4 月 16 日 (日) 東京版 12 面「社告」

この「社告」にはく身体障害者に対する世の理解を深めるために「第 11 回身体障害者福祉展」を催します。>という一文が添えられ、「社告」をもって一報された。

※日本点字図書館は、6 回目の「身体障害者福祉展」への出展になる。

会期及び会場	4 月 18 日から 23 日まで／池袋 三越 (6 階催し物会場)
主な内容	①身体障害者の更生援護に関する資料 (写真、ポスターなど) / ②各種補装具 / ③全国各地の補導所、授産場その他で障害者がつくった衣料、竹細工、革製品など数千点の展示と実費即売 / ④点字図書および点字器具の展示 / ⑤身障者の「竹細工」「木彫り」の実技公開 / ⑥身障者の更生相談。
主催	厚生省、東京都、日本赤十字社、鉄道弘済会、友愛十字会
後援	労働省、朝日新聞厚生文化事業団

## 15. 昭和 36 (1961) 年 4 月 18 日 (火) 夕刊 7 面

「身体障害者福祉展」初日、義宮殿下と三笠宮殿下の来場を報じる記事が当日夕刊に掲載された。記事のタイトルは「両陛下・「身体障害者福祉展」へ」である。

記事の内容は、以下のとおりである。

18 日朝、東京・池袋の「三越」で開かれている「身体障害者福祉展」を義宮さまと三笠宮さまが見学された／この展覧会は 4 月いっぱい行われる「身体障害者福祉強調運動」のひとつとして、厚生省や日赤などが主催したもので、東日本の体の不自由な人たちの作品約六千点が展示、即売されている。

## 16. 昭和 38 (1963) 年 5 月 7 日 (火) 夕刊 6 面

第 12 回「身体障害者福祉展」初日、義宮殿下の来場を報じる記事が当日夕刊に掲載された。記事のタイトルは「義宮さま、身障者福祉展をご覧」である。

記事の内容は、以下のとおりである。

※日本点字図書館は、8 回目の「身体障害者福祉展」への出展になる。

義宮さまは 7 日午前 10 時、東京・池袋の三越においでになり「第 12 回身体障害者福祉展」をご覧になった／田辺日赤副社長らの案内で義宮さまは、身体障害者が実演する版画刷りやべっこう細工をはじめ点字翻訳のもようなどを約三十分間にわたって熱心にご覧になられた。

## 17. 昭和 41 (1966) 年 4 月 15 日 (金) 夕刊 10 面

第 15 回「身体障害者福祉展」初日に皇太子殿下、皇太子妃殿下の来場を報じる記事が当日夕刊に掲載された。記事のタイトルは「皇太子ご夫妻もご覧：身障者福祉展ひらく」である。

記事の内容は、以下のとおりである。

※日本点字図書館は、11 回目の「身体障害者福祉展」への出展になる。

「身体の不自由な人たちに働く希望としあわせを」と第15回目の身体障害者福祉展が15日から東京・新宿の小田急百貨店で開かれた。／初日には皇太子ご夫妻もお見えになり、川西日赤会長、牛丸厚生事務次官らの案内で午前9時半から約一時間半、熱心に見て回られた／身障者の実態、障害の原因などを示す図の前では長いこと足を止められ、寺尾国立東京視力障害センター所長らに細かく質問された／また身障者のテレビ組立て、ベッコウ細工などの実技の公開や義手、義足の展示には声をかけられたり、一々手に取られたりしていた／同展は20日まで開かれ、芸能人のチャリティサイン会なども開かれる。  
※写真掲載「身体障害者福祉展をご覧になる皇太子殿下ご夫妻」と記す。

この昭和41年の第15回身体障害者福祉展を報じる朝日新聞の記事には、日本点字図書館のブースにおいて本間一夫と加藤善徳が説明をしている写真が掲載されているが、新聞記事の内容には日本点字図書館についての言及はなかった。

#### 18. 昭和47(1972)年4月7日(金)夕刊10面

第21回「身体障害者福祉展」初日に皇太子殿下、皇太子妃殿下の来場を報じる記事が当日夕刊に掲載された。記事のタイトルは「皇太子ご夫妻見学：身体障害者福祉展開く」である。

記事の内容は、以下のとおりである。

※日本点字図書館は、17回目の「身体障害者福祉展」への出展になる。

第21回身体障害者福祉展が7日、厚生省、東京都、日赤など主催、朝日新聞東京厚生文化事業団などの後援で東京・新宿の京王百貨店で開かれた／この展覧会は身体障害者の人たちが、社会への参加をめざし、いかに努力をかさねているかなどを広く一般に理解してもらおうと開かれたもの／この朝、皇太子ご夫妻も会場においてになり、一時間余にわたり身障者の福祉状況を示した写真やパネル、身障者の日常生活用具などを熱心にご覧になり、即売コーナーで身障者が作った手さげかばん、竹細工を買われた／同福祉展は12日まで開かれる。

### 3. 「事業報告」調査の成果

本研究の調査結果から浮かび上がってきたのは、日本点字図書館が「国産盲人用具」の研究開発普及に取り組んでいた史実である。

昭和39(1964)年度から昭和41(1966)年度「事業報告」の「欧米盲人用具展示」の見出しは、昭和42(1967)年度「事業報告」からはなくなった。昭和42(1967)年度から昭和44(1969)年度「事業報告」には、「国産盲人用具展示」という新たな項目が明示されるようになったことは特筆すべきことである。

昭和43(1968)年4月12日から17日まで、東京・新宿の京王百貨店に於いて開催された「第17回身体障害者福祉展」に出展した日本点字図書館は、国産盲人用具への取り組みを伝えている。この史実は、同館のアルバムに残された一枚の写真が物語っている。この写真は、「第17回身体障害者福祉展」の日本点字図書館のブース壁面に一枚のパネルが掲げられていたことを鮮明に記録しており、極めて興味深い(図2)。

## 図2 パネル「盲人生活用具」



出典：日本点字図書館所蔵

日本点字図書館は、このパネルに、下記の文面を記している。

「盲人生活用具」 見えぬ人々のために 生活用具を工夫して下さい!!  
欧米では全盲の夫婦が他人の手を借りずに家庭生活が営めるよう、盲人のためのあらゆる生活用具がつくられています。わが国では採算がとれないため、ごくわずかしかなかく、それも篤志家の犠牲によって提供されている現状です。1964年日本点字図書館が欧米から収集した200点の盲人用具が識者の注目を集め、盲人用具に明るい光がさしかけました。現在このようなものが出来ています。皆さまから、アイデアの提供、製作への協力、希望等がありましたら、下記へお申し出願います。

社会福祉法人 日本点字図書館

東京都新宿区諏訪町 212 電話 361-3661・7805

この昭和 43（1968）年に開催された「第 17 回身体障害者福祉展」に掲げられたこの一枚のパネルには、国産盲人用具の研究開発普及に取り組んだ本間一夫と日本点字図書館の意志と時代背景が反映されており、雄弁な史料として再認識を期するものである。

昭和 39（1964）年の欧米視察から帰国後に開催された欧米盲人用具展示の盛会は、同館に購買部設置を試み、やがて第三の事業として用具部発足への道を拓いた。その結果、昭和 42（1967）年の定款の目的に「盲人生活用具の開発と普及事業の経営」を加えることとして、定款変更を申請するに至った。定款変更が成された昭和 43（1968）年には、『感謝録』の最終ページ、「日本点字図書館案内の目的」に、「指先で読む点字書と耳で聞く録音テープの製作と無料貸出」の一文とともに、「盲人生活用具の研究開発と普及」が明記されるようになったのである。

今般、「国産盲人用具展示」という文言や、「身体障害者福祉展」に掲げられたパネルに導かれ、日本点字図書館用具事業史を解明するために不可欠な諸史料を発掘することができたことは本研究の成果といえよう。

## おわりに

本稿では、日本点字図書館の支援者に送付した『感謝録』の「事業報告」調査結果に照らし、「身体障害者福祉展」における日本点字図書館の活動実態について述べた。

「身体障害者福祉展」における日本点字図書館の活動は、昭和31(1956)年から19回連続して出展していたことが判明した。また、昭和42(1967)年度から昭和44(1969)年度の「事業報告」には、「国産盲人用具展示」という新たな項目が明示されるようになった。特筆すべきは、「身体障害者福祉展」に「和製盲人用具」が出展していた史実を突き止めるに至ったことである。

なお、補足的に朝日新聞の記事調査を試みた結果から「身体障害者福祉展」に関する新たな知見が得られたことも有益であった。同展の開催内容は、朝日新聞が報じた社告によって、「補装具と参考品の展示／製作品の展示と即売／更生援護の資料の展示」等であることが浮かび上がってきたからである。また、昭和30(1955)年6月、第4回「身体障害者福祉展」からは、社告のリードに「身体障害者に対する世の理解を深めるため」という一文が付き、同展開催の目的がより一層明確になった。

社会福祉法人日本点字図書館は、盲人福祉の立場から「身体障害者福祉展」への出展を重ね、身体障害者への理解を深める啓発活動の一翼を担うべく社会的役割を果たしていたことが顕著となった。

今後の課題は、初代用具部長の花島弘が帰国後開催した昭和50(1975)年の海外盲人用具展示会、またその後の諸活動に焦点をあてて研究調査を継続し、日本点字図書館用具事業史を探究することである。

## 〔註釈〕

1. 丸山一郎は自著『障害者施策の発展』に「身体障害者福祉法」制定時(昭和24年12月26日)と現行(平成9年12月19日法律第131号改正現在)の比較を対照表に整えて掲載している。「点字図書館」は、現行では「視聴覚障害者情報提供施設」として、第33条に「視聴覚障害者情報提供施設は、無料又は低額な料金で、点字刊行物、聴覚障害用の録画物その他各種情報を記録した物であって専ら視聴覚障害者が利用するものを製作し、又はこれらを視聴覚障害者の利用に供する施設とする。」と規定されている。なお、第34条の「点字出版施設」は「削除」となった。
2. (西武デパート・957・5)は誤植である。『日本点字図書館五十年史』のグラビア「1951(昭和26)年-1960(昭和35)年」の写真「昭和32年5月 身体障害者福祉展に出品」に照らすと、正しくは(西武デパート・1957・5)であろう。
3. 本間律子著『盲人の職業的自立への歩み：岩橋武夫を中心に』には、身体障害者福祉法成立に盲人達が果たした役割について詳細に論じられている(第4章)。身体障害者福祉法の理念が「合理的保護」概念そのものであることを指摘している。また、日本盲人社会福祉施設連絡協議会の設立は、岩橋武夫の「合理性の発露」に他ならない、と述べている(第5章)。この第5章の「2. 日本盲人社会福祉施設協議会の準備」には、昭和27(1952)10月23日、24日、東京の日本赤十字本社において開催された「盲人社会福祉施設連絡協議会」について、次の一文が記されていることが判明した(本間律子2017:137-139)。

(前略) 会議の結果、次の決議が採択された。(中略) 採択された決議「(2)我等は視覚障害者の更生援護を目的とする収容ならびに職業補導施設の目的遂行にあたって、次の諸点の実現を規す」(中略)「(ホ) 障害者の製作品展示会に要する諸経費は、国または公共団体においてこれを支給されるよう運動すること」(後略)

したがって、昭和 31（1956）年に日本点字図書館が初出展をするに至るまでの期間において、関係者の間では「障害者の製作品展示会」または「身体障害者製作品展示会」という名称を用いていたことが示唆された。

4. 昭和 31（1956）年 5 月 21 日付朝日新聞夕刊の「社告」に照らすと、開催期日は 5 月 22 日から 27 日であろう。
5. 内閣府ホームページ『平成 29 年版 障害者白書』の参考資料「障害者施策の主な歩み」に掲載されている情報である。  
<https://www8.cao.go.jp/shougai/whitepaper/h29hakusho/zenbun/index-pdf.html>  
 （最終閲覧年月日：2023 年 8 月 30 日）
6. 「身体障害者製作品購買審議会は、身体障害者福祉法に基きまして、身体障害者の製作品の購買の事務について調査審議する審議会」と記載されている会議録情報は、シルバー産業新聞社編集長の安田勝紀様より寄せられましたことを謝意と共に付記します。  
 この一文は昭和 26（1951）年 5 月 15 日に開催された第 10 回国会参議院内閣委員会の会議録に掲載されており、「身体障害者福祉展」に関する情報収集が難渋するなかで「障害者の製作品や展示」に関する興味深い議論が読み取れる貴重な情報である。  
 「第 10 回国会 参議院 内閣委員会 第 23 号 昭和 26 年 5 月 15 日」  
<https://kokkai.ndl.go.jp/simple/txt/101014889X02319510515>  
 （最終閲覧年月日：2023 年 9 月 4 日）

### 〔謝辞〕

本研究のために、貴重な諸資料の閲覧ならびに掲載許可を賜りました日本点字図書館理事長の長岡英司先生、館長の立花明彦先生、資料の収集整理ならびにご助言を賜りました文化資料室の伊藤宜真様、濱田幸子様、川島早苗様、渡邊明様に多大なご高配を賜りました。また、シルバー産業新聞社編集長の安田勝紀様に貴重な情報を賜りました。ここに記して皆様に深甚なる感謝の意を表します。

### 〔文献〕

- 本間一夫（1980）『指と耳で読む』（岩波新書 黄版 138）、岩波書店  
 本間一夫（1999）『忘れ残りの通信集：点訳ボランティアの方々へ』、日本点字図書館（非売品）  
 本間一夫（2004）「日本の盲人福祉事業：点字図書館」『世界盲人百科事典』（底本：世界盲人百科事典編集委員会編（1972）『世界盲人百科事典』、社会福祉法人 日本ライトハウス刊）、日本図書センター、489-493。  
 本間律子（2017）『盲人の職業的自立への歩み：岩橋武夫を中心に』関西学院大学出版会  
 宮内庁（2017）『昭和天皇実録 第十三』東京書籍株式会社  
 丸山一郎（1998）『障害者施策の発展：身体障害者福祉法の半世紀』中央法規出版株式会社  
 日本点字図書館 50 年史編集委員会編（1994）『日本点字図書館 50 年史』日本点字図書館（非売品）  
 西脇智子（2023）「「点字本ゴッホ」という起点と真相：式場隆三郎による日本点字図書館後援活動の継続調査より」『歌子』第 31 号、65-78。  
 関宏之（2002）「第 5 章 盲人福祉の国際連携と岩橋武夫／第 1 節 盲人福祉の組織替えと岩橋武夫」日本ライトハウス 21 世紀研究会編『わが国の障害者福祉とヘレンケラー：自立と社会参加を目指した歩みと展望』教育出版、69-75。